

国立西洋美術館の建物（ル・コルビュジェの設計）

国立西洋美術館（NMWA）本館は、フランス人建築家ル・コルビュジェ（本名：シャルル＝エドゥアール・ジャンヌレ＝グリ、1887年－1965年）の設計によります。20世紀初頭に出現し、第二次世界大戦後に建築思潮を席卷したモダニズム思想の旗手、ル・コルビュジェは、外観よりも機能性を大切にする、統一された「人体の寸法に沿った」建築物という主張をしました。ル・コルビュジェの主要なアイデアのいくつかは、1959年に完成したNMWAに取り入れられています。

円柱の上に建つ

国立西洋美術館（以下NMWA）の正面を遠くから眺めると、NMWAは地上から持ち上げて柱の上に載せた巨大なコンクリートのマッチ箱のように見えます。柱が建物の重量や床を支え、間仕切り壁も外壁もある程度自由に配置できることとなります。建築家ル・コルビュジェがピロティと呼ぶこの独自の方策は、彼の多くの建築物において基本的な特徴になっています。NMWAを訪れるとその特徴を明確に見てとれます。他の美術館はほとんどが、来館者の視線をさえぎり得るものが存在しない空間にだけ美術品を展示しますが、NMWAの展示室は、松の木の型枠にコンクリートを注ぎ込んだ柱で視線がさえぎられます。これはル・コルビュジェのビジョンが目に見える証拠となつて提示されたものです。外壁はピロティで支えられているため、建物の構造健全性にとって重要なものではありません。遠くから眺めると外壁は平坦に見えますが、近づくと、翡翠が埋め込まれた取り換え可能なパネルでできていることがわかります。

人体の身体に沿った建築

人体に基づく調和のとれた尺度であるモデュロールは、ル・コルビュジェのもう一つのアイデアで、NMWAの建物全体を通じて採用されています。ル・コルビュジェの日本人の弟子たちは、この尺度から導かれる統一された寸法を用いて、美術館のバルコニーの手すりの高さ、ピロティ柱どうしの距離、前庭のサイズといったものを決定しました。ル・コルビュジェは建築物を「人体の寸法に沿った」ものにするためにモデュロールシステムを考案しましたが、出発点として身長183センチの人を用いました。そのため、それぐらいの身長の人

にとって NMWA はとても快適な建物になるでしょうが、それより背の低い人や高い人にとってはそれぞれ、時につま先立ちしたりかがみこんだりする必要があるかもしれません。

無限成長

ル・コルビュジェの「無限成長美術館」のコンセプトは、NMWA の設計に際してのおそらく最も野心的なアイデアです。建築家ル・コルビュジェは、必要に応じていつでも拡張できる美術館を構想しました。最初は展示室の間仕切り壁を並べ替えることによって、後には部屋やフロア全体を建物に追加することによって。究極的には中央ロビーの周囲を取り巻くピラミッド風の構造を想定していました。NMWA はこのコンセプトの要素をいくつか取り入れています。例えば、中央のエントランスホール、ホールかららせん形に上っていく通路風のつながりの長方形の展示室、あるいはそれらの部屋の可動壁です。しかし、フロアの追加構築が現実的なアイデアとは見なされることは、決してありませんでした。建物前面の巨大な窓も、建築家ル・コルビュジェの奇想を示しています。ル・コルビュジェは、建物に自然光を取り込むことをたいへん重視しましたが、そのような方策が美術館にとって適切かどうか考慮しませんでした。現在、NMWA では展示美術品を保護するために、太陽光の入射を厳しく制限しています。